

たか と さとし
高 戸 聰

学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第 395 号
学位授与年月日	平成24年 3月27日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	東北大学大学院文学研究科(博士課程後期 3 年の課程) 文化科学専攻
学位論文題目	中国神話における天と人との媒介として機能する神の研究
論文審査委員	(主査) 教授 花 登 正 宏 教授 佐 竹 保 子 教授 三 浦 秀 一 教授 川 合 安 准教授 齋 藤 智 寛

論文内容の要旨

目次

緒言

第一章 天と地との分離を語る神話——蚩尤に関する神話を中心として——

第二章 「長沙子彈庫帛書」に見る天地創造の神話

第三章 五行説成立以前の四方神と「四神」の関係について

第四章 山川の「神」の性格について

第五章 「明神」の性格に関する一考察

結語

緒言

中国における神話研究は、その萌芽期(1920~1937年)から、研究方法の違いによって、大きく二つの立場に分けることができる。¹

一つは、茅盾氏²に代表されるような、西洋の神話研究の方法を導入し、中国の神話を似た構造の神話や他の地域の神話と比較し、その原初的な意味を考察する研究方法である。

1 馬昌儀編『中国神話文論選萃(上下編)』中国広播電視出版社、一九九四年

2 茅盾『中国神話研究 ABC』(『名家説—“上古” 學術萃編 茅盾説神話』上海古籍出版社、一九九九年。初版は、玄珠の署名で、一九二九年に世界書局から出版された。)

もう一つは、楊寬氏³に代表されるような、各々の神話伝説を各々の民族や部族に分属させ関連づける研究方法である。後者については、聞一多氏⁴や孫作雲氏⁵の研究以降、トーテミズムを用いて、神話と民族の関係を説明する研究が主流と成っていく。

前者については、その研究方法から比較神話学と言うことができる。中国の神話と他の地域の神話を比べる際に問題となることは、中国神話と比べる他の地域の神話が、その比較対象として適当であるか否か、という点である。また、それぞれの神話群の中から、特定の幾柱かの神々のみを取り出して、比較する方法は、一面的となる欠点を免れない。

次に後者については、神話から古代の民族や部族を推測する点に問題があると考えられる。そのような部族が存在したかどうかは仮定の話であるし、存在したとしてもそれぞれの部族がある神話に見られる神を信奉していたかどうかはまた別の問題となる。

またトーテミズムを援用する研究について、そもそもトーテミズムには、レヴィ＝ストロース氏の批判がある⁶。氏に拠れば、トーテミズムとは、ある民族が自然を自分たちの社会と関連させて考える際の分類体系の一つでしかない。民族学者たちは、この分類体系を、不完全な形で取り出し、殊更にそれを人類の発展段階に普遍的に見られる制度と見なしたのだ、とされる。さらに今日の中国神話研究では、トーテミズムの意味を拡大して用いすぎている点も問題である。

以上の中国神話研究における状況を踏まえて、本論文では、ある神について、先史時代にまで遡ってそれを信奉したであろう民族や部族を探求することはしない。あくまで文献が書かれた先秦時代を対象とする。また、それぞれの神話群の中から、特定の幾柱かの神々のみを取り出して比較する比較神話学が抱える問題を回避するため、より普遍性があると考えられる、神の持つ役割や機能的側面について、考察していく。そうすることで、この時代の神観念を理解し、他の地域の神観念と比較する上での土台となる枠組みが得られると考えるからである。

本論文では、個々の神々の来歴ではなく、先秦時代の神々を包括的に扱い、この時代の神観念が持つ、至上神と地上の人々との間での、媒介としての機能を明らかにする。そこから、天の至上神と、直接に天とは交流を持ってない地上の人々、及び前二者の間で媒介として機能する「神」、という三極構造を示し、他の地域の神話と中国神話を比較する際の土台となる枠組みを提示することを、企図するものである。

第一章 天と地の分離を語る神話——蚩尤に関する神話を中心として——

本章では、「蚩尤」に関する神話を検討することを通して、古代中国に見られる天地分離神話について確認した。

『史記』五帝本紀に記されるところでは、「蚩尤」は「神農」の世が乱れた時に登場し、諸侯の中で最も暴虐を為したとされる。その後「蚩尤」は、「神農」を破った「黄帝」と争い誅殺された、とされる。

『史記』五帝本紀のこの部分は、『大戴礼記』五帝徳篇の文と、「蚩尤」に関する文献もしくは伝承とが、

3 楊寬「中国上古史導論」(『古史辨』(第七冊上篇)開明書店、一九四一年)。

4 聞一多「伏羲考」(『聞一多全集』開明書店、一九四八年)。

5 孫作雲「蚩尤考—中国古代蛇氏族之研究・夏史新探」(『孫作雲文集(第三卷) 中国古代神話伝説研究(上)』河南大学出版社、二〇〇三年)。初出は、『中和月刊』一九四一年第二卷第四・五期。

6 クロード・レヴィ＝ストロース著中澤紀雄訳『今日のトーテミズム』(みすず書房、二〇〇〇年)。原題は、“Le totemisme aujourd’ hui” (P.U.F.1962)。

クロード・レヴィ＝ストロース著大橋保夫訳『野生の思考』(みすず書房、一九七六年)七三頁。原題は、“La Pensee sauvage” (Paris,Librairie Plon,1962)。

組み合わせられて書かれたと考えられる。この蚩尤に関する文献もしくは伝承は、『尚書』呂刑や『山海經』大荒北経に見られる。「蚩尤」は、『尚書』呂刑では世に始めて乱をもたらしたものとして、『山海經』大荒北経では天上の神である「黄帝」に抗い世を乱す悪神として、描かれている。本章では、このような「蚩尤」に関する神話に、天地分離神話の要素を見出すことができることを示した。

天地分離神話とは、原初において未分化であった天地がどのようにして分離し、現在のような世界になったか、を語る神話である。中国の天地分離神話には、「重黎」や「共工」の神話に登場する、「地天の通」や「天柱」のような「中心のシンボリズム」が認められる。「重黎」や「共工」の神話では、この「中心のシンボル」を絶つというモチーフが共通して見られる。

「中心のシンボリズム」とは、ミルチャ・エリアーデ氏の所説に拠れば次のような概念である。すなわち、世界各地の古代社会には、世界の中心に山・柱・樹木などで表される「中心のシンボル」が存在するという信仰がある。この「中心のシンボル」は、天上・地上・地下の三つの世界を貫いて立っており、三つの世界の交通はこの軸を通してのみ可能となる、とする。

ただ天地分離神話を持つ意味合いは、それぞれ微妙な違いを見せている。「重黎」と「蚩尤」の天地分離神話には、樂園時代の終焉という意味が込められていたが、「共工」のそれでは、天地分離以前の樂園時代は強調されていない。

また天地分離の原因も、それぞれで異なっている。「重黎」による分離は、天の側から為され、天から地上への罰という意味を持っていた。これに対して「共工」や「蚩尤」による分離は、地の側から為され、その原因は天と地とを分離した者の暴虐さに帰せられていた。その行為は、既存の秩序を破壊し、世界を混沌に引き戻さんとするものであった。

古代中国においては、太古に天と地が分離された結果、神と人とが断絶され、そのせいで神と人とは容易に交流できないと考えられたのである。

第二章 「長沙子彈庫帛書」に見る天地創造の神話

本章では、出土文献である「長沙子彈庫帛書」（以下「子彈庫帛書」と略称する）に見られる天地分離神話について、検討した。

「子彈庫帛書」は、一九四二年湖南省長沙市子彈庫楚墓から盗掘され、蔡季襄の手に渡った。一九四六年にアメリカ人の Jon Hadley Cox によりアメリカにもたらされ、一九六六年に A.M.Sackler が購入した。Sackler の死後一九八七年から、帛書はサックラー博物館に所蔵された。⁷ 当該楚墓は、一九七三年正式に発掘された。その結果、被葬者は士大夫相当の身分で、被葬年代は戦国時代中晩期であるとされる。⁸ 当該帛書は、おおよそ四七cm×三八cmだが、周囲に脱落もある。中央部には、八行と十三行の文章が、それぞれ上下逆に記されている。周辺部には、樹木と異形の神々の絵が描かれ、二～三行の短い文章（辺文）が記されている（以降、池澤優氏⁹に従い、それぞれを「八行文」・「十三行文」・「辺文」と呼ぶ）。樹木は、四隅に描かれ、青・赤・白・黒で彩色されており、異形の神々の絵は、十二体が一边に三体ずつ、頭部を中心にに向けて配置されている。「辺文」は、これら異形の神々の側に二、三行の文章で記されている。

「八行文」では、出土文献にも天地分離神話が見られることを確認し得た。ただし「八行文」の天地分離は、前章で確認した、天と地を繋ぐ通路等が物理的に破壊されて天地分離がなされたとする神話と

7 李零「楚帛書の再認識」（『中國文化』第十期、一九九四年）

8 湖南省博物館「長沙子彈庫戦国木椁墓」（『文物』一九七四年第二期）

9 池澤優「書き留められた帝の言葉—子彈庫楚帛書に見る天・神・人の関係—」（『宗教研究』七二巻四号、一九九九年）

は違い、「帝」の「もし天が傾くような秩序の混乱でもなければ、天靈を煩わせてはならない」という言葉によって観念的になされていた。だがいずれにせよ、伝世文献のみならず出土文献にも天地分離話を認めることができたのであり、古代中国には天と地の間には断絶があるとする認識が存在したと言える。

しかし、「八行文」における天地分離は、完全な断絶ではなかった。何となれば、「八行文」においては「祝融」・「四神」・「百神」、**「十三行文」**においては「群神」・「五正」のような、地上を管理・監督し天上の至上神と地上の人々を仲介する神が存在すると考えられていたからである。天上の至上神と地上の人々との間に、断絶があるとする認識が前提となり、天と人との交流は、彼ら「祝融」・「四神」・「百神」・「群神」・「五正」のような「神」を通じて、可能であると考えられてもいた。裏を返せば、断絶こそが、「神」を通じた至上神と地上の人々との交流を際立たせ、「神」の持つ天の至上神と地上の人々との間で媒介として機能する仲介者としての役割を強調していたと言えよう。

つまり天と地が分離され、地上の管理が「神」に委任された時点で、天の至上神・直接に天とは交流を持ってない地上の人々・前二者を媒介する地上の神、という三極構造が確立された、と考えられるのである。そもそも古代中国の天（上天・上帝）が、地上の人に対して直接的に明確なメッセージを与えることは稀であった。それ故に、春秋戦国時代における天と人との関係は、構造的に仲介者を要請するものであったと思われるのである。

第三章 五行説成立以前の四方神と「四神」の関係について

前章で検討した「子彈庫帛書」では、「四神」や「群神」・「五正」などの「神」が、至上神と地上とを繋ぐ媒介として機能していた。これら媒介として機能する「神」のうち「四神」は、五行説との影響関係を看取することができる。

そこで本章では、まず五行説の成立過程について論じ、そのうえで「子彈庫帛書」の「四神」と五行説との関係について検討した。

五行説とは、本来無関係なはずの事象を関連づけて考える分類体系であると考えられる。それは方位や季節や音階や色などといった本来無関係な区分の系列を、木・火・土・金・水の五つの要素に関係づけ分類することで成立している。この五行説において、方位と四季の関連は中心的な位置を占めている。

五行説は、従来、殷代四方風がその起源の一つとされている。殷代の甲骨文には、四つの方位・そこから吹く風・風を司る神の名を記したものがある。この殷代四方風の伝承は、『山海経』と『尚書』堯典とに形を変えて残されている。『山海経』では、四方から吹く風と四方風神が記されているが、四方と季節との結びつきは確認できず、時令思想との関係も認められない。『尚書』堯典には、殷代四方風の名前が農業を基盤とした人々の営みを表す語として記されている。この『尚書』堯典では、時令思想の萌芽は認められるが、五行説への直接的な継承関係は認められない。それ故、四方と四季は、『山海経』から『尚書』に至るまでの間に、結びつけられていったと考えられる。

ところで『毛詩』には、「方社」という季節祭が詠われている。この「方社」の祭は、万物が育成したことを、四方の氣に報いる祭りであるとされる。四方の氣とは、『爾雅』や『呂氏春秋』の記述から、各々の季節に四方から吹き寄せる風であると考えられる。

「方社」の祭においては、四方と季節とは風を仲立ちとして結びつけられている。また、周期的に行われる農耕儀礼としての側面を持つことから、素朴な時令思想の萌芽も認められると思われる。さらに、四方位と土地神が祭祀を受ける対象となっており、五行説の基本的な枠組みも窺われる。そしてこの枠組みが、四方から五行説へと発展していく際の、一つの契機になったと考えられるのである。

一方で、それぞれの方位に配当される神の名に関しては、幾つかの組み合わせが平行していた。恐らくは、方位・季節・色が互いに配当された後、最終段階で『呂氏春秋』に見られるように「句芒」・「祝融」・「蓐收」・「玄冥」に固定されたものと考えられた。

それぞれの方位に配当されるこれらの神々は、天と地上の人々とを仲介し、天の至上神の下位に位置し、天の職責を代行することによって世界の秩序を維持している、とも考えられていた。このような仲介「神」は、伝世文献である『呂氏春秋』では「句芒」・「祝融」・「蓐收」・「玄冥」、出土文献である「子彈庫帛書」では「祝融」と「四神」とがあった。

地上の秩序を維持管理するこのような「神」は、五行説の影響により各々の「帝」の下に「佐」あるいは「神」が配置されていると考えられるようになると、「句芒」・「祝融」・「后土」・「蓐收」・「玄冥」の五柱の神々に固定化されていった。しかし、五行説の成立過程においては、殷代四方風に淵源を持つ風神を初めとして、『山海経』に記録される四方神や「子彈庫帛書」の「四神」など、幾つかの組み合わせが平行して行われていたものと推測できる。このことは、「神」がもともと木火土金水の要素とは、直接関係していなかったことを示唆している。

第四章 山川の「神」の性格について——「其の為を^{おこない いさぎよ}鑑く」しない「間行」ある神々——

本章ではまず、出土文献である「子彈庫帛書」に見られた、至上神と地上の人々との媒介として機能する「神」の観念が、『毛詩』や『春秋左氏伝』などの伝世文献にも見られることを確認した。彼らは、「天」や「帝」の下位に位置し、その使いとして現れ、その意志を遂行すると考えられていた。

また、『礼記』に「天子は天地を祭り、四方を祭り、山川を祭り、五祀を祭り、歳に徧し。諸侯は方祀し、山川を祭り、五祀を祭り、歳に徧し。大夫は五祀を祭り、歳に徧し。士は其の先を祭る」（曲礼下）とあるように、古代中国では、祭るべき対象である「神」が、各々の身分や地位に応じて、理念的にはあるが、定められ秩序付けられていた。それ故、それ以外の神は祭るべきでないと言われ、祖先神に関しても、同族の祭祀でなければ受けないとも言われた。

しかし、古代文献を丹念に読んでいくと、理念的に祭るべき対象ではないはずの神々が、祭祀を受けている例が散見される。その上、上帝の下位に位置しその意向に沿って動くはずの「神」が、独断とも思える仕方で祭祀を要求する例も見られる。このことを『国語』では、古の理想的な王の統治が衰えた後のこととして、「神は民則に狎れ、其の為を鑑くせず」と表現している。さらに『国語』からは、「民」と「神」が密接な関係を持っているとする認識を読み取ることが出来る。

『史記』や『左伝』には、黄河の神や霍の泰山の神が、君主に交渉を持ちかけている例が記録されている。さらに、出土文献である「東大王泊旱」でも、「神」が祭祀を求めて崇ることがあり得る、とする認識が見られる。

天や上帝の下位に位置し、その意志を伝えたり、地上に禍福をもたらす「神」は、必ずしも天（上帝）の命令を待って行動するだけではなく、時には独断とも思える仕方で祭祀を求めてもいた。その際、「神」は崇りという方法を用い、為政者に祭祀を迫るものと、当時の人々に認識されていたと推測できた。このように、「神」にも「其の為を^{いさぎよ}鑑く」しない「間行」ある者がいると認識されていたがために、為政者の側でも、理念的な規範に外れる「神」を祭ることで、自己の利益を図ろうとすることがあったものと思われる。

第五章 「明神」の役割と性格に関する一考察

本章では、人に「狎れる」神々とは正反対の性格を持っていたと思われる「明神」について、考察

した。

『左伝』においては、「明神」は盟誓の言葉を記録した載書の文言で言及される。例えば、「踐土の盟」の載書では、「此の盟に渝くこと有らば、明神之れを殛せ」と誓い、もし盟誓の言葉に背けば「明神」が背いた者に罰を与えるとされる。この他の『左伝』に記される載書の用例からも、「明神」とは、もっぱら盟誓に関与する神であるように思われる。

しかし、実際に出土した載書である「侯馬盟書」や「温県盟書」中に、「明神」の語を直接に記す例は見当たらず、「明神」が盟誓に関与していたことは確認できない。このことから、「明神」が盟誓にのみ関与する神であったとは考え難いのである。

一方で、『国語』には、盟誓に関与しない「明神」の用例が記されている。『国語』の用例から看取できる「明神」とは、為政者の徳や統治状況によって「福を布く」こともあれば「禍を降す」こともある、人間世界に積極的に介入する神である。さらに、『国語』では、「明神」として、祝融・回祿・禱杵・夷羊・鸞鷲・杜伯及び丹朱が挙げられている。これら「明神」として挙げられている神々は、それぞれ雑多な性格を持つ神々である。このことから「明神」とは、ある特定の一柱の神を指すのではなく、不特定の神が担うある性格を強調する際に使う用語であり、神の役割の一つではないのかと考えらる。

「秦駟禱病玉版」には、実際に「明神」に対して為された祈りの言葉が記録されている。その祈禱文では、「土姓」の「刑法氏」、名は「陘」というものが、「明神」とされ、この「陘」は廉潔で正しい性格であるとされる。「陘」の公正さは、『国語』に見える「明神」の姿とも重なるものである。

さらに『晏子春秋』の例からも、「明神」の、罪あるものを罰し罪なきものを宥す公正さを見て取ることができる。『晏子春秋』には「無罪の国を伐ち、以て明神を怒らし」と言い、無辜の国を正当な理由なく征伐することは、「明神」の怒りを買う行為であるとされている。

『左伝』に記録される「中分の盟」では、強要される盟誓には「明神」も来臨しないとされ、「明神」が保証するのは、「信」や「善」の伴った盟誓であるとされる。

「明神」とは、ある特定の神を指すのではなく、不特定の神が担うある性格を強調する際に用いられる語であり、その性格故に、公平さが求められる盟誓に関与してその確かさを保証することが期待されたのである。

「明神」のこのような性格は、第二章で確認した「神」の性格と重なる。「子彈庫帛書」十三行文では、「神」は「是れ徳匿するも、群神乃ち徳すと謂う」や「惟れ天は妖を作すも、神は則ち之れを恵す」とあり、天である「帝」が「徳匿」という災厄を降すとしても、「神」は地上の人々に幸いを恵もうとするとされた。

どちらも、天が地上に災いを降す際、地上の人々と天の間の仲介者の役割を担っており、地上の人々が天に働きかける余地を残しているのである。

他方、第四章に挙げた山川の「神」の、自己の利益を図り、為政者たちと交渉し、交渉が有利に運べば為政者たちに与せんとする性格は、本章で検討した「明神」が持つ公平さとは、正反対のものである。「神」に「間行」すなわち悪事を行う邪な者や、「其の為を蠲く」しない性格を持つ者があると考えられていたがために、「明神」が求められた可能性があるのではないだろうか。

結語

本論文で考察の対象とした「神」とは、天や「上帝」のような至上神の下位に位置し、至上神の意志を地上に伝える役割を担うものである。この「神」は、天の至上神と地上の人々との間で、双方の意志を伝える媒介として機能していた。本論文で強調したのは、「神」が担う、このような仲介者としての

役割であり、その重要性である。

以上のように、先秦時代の「神」は、両極端とも思える性格を持つ者が存在すると考えられながらも、至上神と地上の人々との仲介者としての役割を担っていたのである。

本論文では、先秦時代の「神」が、至上神である天と地上の人々との間で媒介として機能する、言わば仲介者としての役割を持っていたことを明らかにした。先秦時代の神観念では、天の至上神と、直接に天とは交流を持ってない地上の人々、及び前二者の間で媒介として機能する「神」、という三極構造が構成されていたのである。機能的側面から見たこの枠組みは、個々の神々を越えたある程度の普遍性を持っていると考えられる。それ故、中国の神話と他の地域の神話を比較する際の土台となることが期待される。また他の地域の神観念と比べた際、至上神と人との媒介となる「神」に両極端とも思える性格を持つ者が存在すると考えられていたことは、古代中国における神観念の特徴となると思われる。

論文審査結果の要旨

本論文は、緒言、本論の5章及び結語より成る。

緒言では、従来の神話研究について概観した後、先秦時代の文献に基づき、神の持つ機能的側面を考察することにより、該時代に上帝・天などの至上神と地上の人間との間で媒介として機能する神の存在することを明らかにし、その神観念の諸相について論じるという、本論文の研究方法与対象が示される。

第一章では、先秦時代の伝世文献に基づき、原初未分化であった天と地が、どのようにして分離し、現在のような世界になったかを語る天地分離神話について論ずる。その結果、古代中国には蚩尤、重黎そして共工それぞれによる3類の天地分離神話が存在するとして、その諸相について説明し、そのために天と地とは断絶し、天の至上神と地上の人間とは容易に交流できないと考えられていたことを確認する。

第二章では、戦国時代中晩期の出土文献「長沙子彈庫帛書」について検討する。その結果、帛書「八行文」にも伝世文献と同様に心理的・観念的にはあるが天地の間に断絶があるという認識の存在することを指摘する。さらに「八行文」の「四神」・「百神」、「十三行文」の「五正」・「群神」等の神が、断絶した天の至上神と地上の人間との間を媒介する機能を有していたことを明らかにする。

第三章では、五行説の形成過程について考察する。殷代四方風を起源のひとつとする五行説の形成過程について関連文献の成立年代に沿いつつ詳細に検証した結果、「四方」から「五行」への発展の契機、方位と季節・色との配当関係の成立に係る説明になお不十分なところがあるとし、前者については『毛詩』に見られる「方社」という、四方神に加えて土地神を祭祀対象とする収穫祭祀、後者については「長沙子彈庫帛書」八行文に見られる「四神」を資料として付加することにより、五行説の形成過程がより整合的に説明可能となるとする、新説を提示している。

第四章では、山川の神の性格について検討する。先ず伝世文献にも、第二章で検討した如き、至上神と人間との間を仲介する神の存在していたことを示す。ついで、伝世文献・出土文書を問わず、己への祭祀を求めて崇る山川の神のあること、また民の求めに応じて崇りを降す神の存在したこと等、神と人間とが祭祀を通して密接な関係を有していたことを示す。また、山川の神と為政者との関係についても、利益を餌に神の方から己への祭祀を強要するもの、為政者の方から祭るべきでない神を祭り自己の利益を図るなど、さまざまな関係のあったことを明らかにしている。

第五章では、「明神」について考察する。明神は盟誓の確かさを担保する神とされる。しかし、「侯馬盟書」・「温県盟書」等の出土文献の載書に明神の名は見えず、また伝世文献中にも為政者の徳の善悪に

より禍福を下す、盟誓とは関わらない明神が見出され、さらに出土文献「秦駟禱病玉版」にも同様の性格の明神の見えるところから、明神とは、特定の一柱の神名ではなく、公平さと果敢さを併せ持つ不特定の神が担う役割であると結論する。

結語では、本論文の総括と将来の展望が述べられる。

以上、本論文は従来行われてきた比較神話学的方法、あるいは神話伝説を民族・部族と関連させて説く研究方法に代えて、神の機能的側面に注目して、至上神と地上の人間との間で媒介として機能する神の存在を立証し、先秦時代の神観念の諸相を明らかにしたもので、中国神話研究に新しい可能性を拓くものであり、斯学の発展に寄与するところ大である。

よって本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。